

弊社製品のバージョンアップポリシーについて

弊社は最新セキュリティ/ウイルストレンド変化により製品アーキテクチャ/製品ラインナップ変更を実施する事がございます。また各バージョンリリース時点において既定設定値更新が行われる事がございます。その為バージョンアップや後継製品ラインへの乗り換えにおいて、機能差異や動作差異が発生する事がございます。稼働中のプロダクション環境への影響を懸念される場合、お手数ですがテストバージョンアップ検証を行って頂く事をおすすめいたします。弊社ではバージョンアップによるプロダクション環境への影響有無等は保証する事はございません。

機能設定値/メイン機能のセキュリティ担保について

弊社製品各機能の規定設定値はリリース時点のセキュリティトレンド/インストール OS に最適化された状態で設定されております。その為、バージョンアップ等を機会に規定設定値が変更される可能性がございます。セキュリティを担保するメイン機能についての変更(リアルタイムスキャン有効→無効/ディープガード有効→無効)が発生した実績はございませんが、詳細な振る舞い(ウイルス検知後の削除等)についてはウイルストレンド変化により変更された実績がございます。またこれらの変更は、ウイルストレンドの急激な変化を察知した開発が自動アップデートチャネル配信等を通じ変更を配信いたします。

上記の理由からウイルス検知時オペレーション/バージョンをアップ作業等をマニュアル化している場合、これらの変更を考慮いただく必要性がございます。固定化/マニュアル化されたオペレーションはウイルス製作者のターゲットにもなり得ます為、ご理解いただけますと幸いです。

ユーザ設定値の扱いについて

弊社製品バージョンアップにおいて、同一機能/同一設定についてはユーザ設定値が引継がれます。これは弊社製品の設定値のスロット(OID)がインクリメント式で記録されており、ユーザが自身で設定を行った設定値については上書きしない形で設定値保存される為です。しかし弊社では各バージョンリリース毎に機能調整を行っており、それにともない旧バージョンの設定値スロット(OID)が廃止され、新しい設定値スロットが追加される事があります。その場合はユーザが追加設定(インクリメント)した値であっても、次バージョンの製品で参照されなくなります。メイン機能についてはこのような大きな変更はありませんが、全ての値が保持されるという事ではございませんのでご了承ください。

製品アーキテクチャの更新について

弊社製品は製品ライフサイクル(Version 別 EOL)とは別に製品自体の終息を決定し、後続製品として異なるアーキテクチャの製品を発表する事がございます。その場合、上記の”ユーザ設定値の扱いについて”は考慮されず、ユーザの実現させたいセキュリティを後続製品において新たに構築する必要があります。これもウイルストレンド動向変化に対応する為の製品開発活動の一環となりますのでご了承ください。

例)

Linux Security 11.xx 以前	→ Linux Security 64
Threat Shield	→ Internet Gatekeeper
仮想スキャンサーバ	→ Atlant